

年取欄

佐藤 紀子 カナダ

メトロノームのアンダンテよりやや遅し七十八歳わたしの歩調  
まだ父母の遺品整理を終へぬうち自分が老女になりてしまへり  
丸味ある太目の文字で記入さる父の遺しし税申告書  
亡き父の七十代の年取欄見ぬやうにして破き棄てたり  
今日よりは普段、使ひに下ろすべし母の遺しし九谷の湯呑み

双葉町

尾崎 玲 福島

双葉町を検索すれば総人口0人とあり はちねんすぎた  
味噌倉も醤油の樽も朽ちてあむ椗の落葉もうづたかからむ  
双葉町史編纂したる兄逝けり終の避難所会津に老いて  
老いてひとり老いてふたりの歌多し桜前線に沖繩のらず  
けふも雨あすまた雨のふるといふ雨のほひのみちて夕ぐれ

シクロクロス

上野 隆 紘 千葉

丘こえて浜辺よぎれば林道とコースは厳しシクロクロスの  
矢のやうに丘の傾りを下りゆくシクロの選手は背を丸めて  
丘ふたつこゆれば深き砂の浜シクロ横抱きに選手ら走る  
ぬかるみにシクロとられて転倒す雨降りしきる細き林道  
ヌレネズミはたドブネズミ泥しぶき浴びてゴールに入りくる選手

洒落者のごとく

坂田

曙

神奈川

戦没者の兄の今際を知らざれどきさらぎけふは兄の誕生日  
湿原の丹頂四、五羽町へきて洒落者のごとく歩みゆくはや  
夜通しに春一番が吹きしとぞ耳聾われは過去形で知る  
彗星を空に見送り織女われ九十歳に手が届きさう  
長風呂も長寝も老いの暮らしにてスロー、スローの春夏秋冬

ギギと音する

松下菜水

神奈川

雨に髪濡れて帰れば二十年ぶりに母より手紙来てをり  
凭ればギギと音する木の椅子に母の便りをまた読み返す  
巢のなかの卵のやうに温めつ言葉にならぬわれの気持ち  
待たれある返事と知れどあと十日待たせむ桜の切手貼りたし  
青ペンで葉書認め投函す遠くへ鳩を放つごとくに

村上郷

福島壺春

東京

海に日が落ちてゆくころ牡蠣を剥くをんな等あまり喋らずなりぬ  
一株のキャベツ採り残されてあり夕日の中のその黄なる花  
椎に降る雨見てをれば葉の蔭に枯蟪蛄のひつそりうごく  
川沿ひに古きカフェあり燠炉燃え冬も天井の扇風機廻る  
乾鮭をくぐれば荒るる海の見ゆ村上郷の古き宿なり

顔パツク

齊藤淳子 長野

目の穴に目を口の穴に口を当て湯上がり顔にパツクを貼りぬ  
穴の外のぞく心地に読書せり顔パツクして眼鏡をかけて  
パツクして顔の表情消して読む米朝首脳会談の記事  
気まぐれな神が置きたる目と鼻と口ひと揃ひわれの顔なり  
教卓にしばらく置けばわが眼鏡われの知らない眼差しをもつ

アトムとウラン

森田治生 三重

終電を待つ人のなか一番の年長はわれたぶんではなく  
三歳とひと日遊んだあくる日の頬<sup>けこ</sup>骨筋<sup>こきん</sup>のほどよき疲れ  
寂しくて人と会ひたくない時はAB型のふりして過ごす  
七十年前にAI備へをり鉄腕アトムと妹ウラン  
操縦器敵が奪へば敵となる鉄人28号の闇

箱のなかには

桑原博 大阪

ねぢ山のつぶれたねぢが厄介な一日が過ぎけふをむかへる  
計測チップ外してくれてありがたうゴールの後もいまだたゆたふ  
肌色をうすだいたいと書いてある子どもの頃とちがふクレパス  
クレパスの箱のなかには虹がある白黒をきめるなんて言ふなよ  
0か百か、白か黒かですごしきて例へば虹の藍を生きたし

東病棟午前二時半

小野 はつね 兵庫

空耳に鳥のさへづり聞きて覚む東病棟午前二時半  
病室で眺める矩形の冬空を雲、鳥、何時かの私が過ぐ  
窓を開けゆつくり息を吐きたれば裸木の枝のかすかにふるふ  
退院の夕べ雪降り家といふ揺籃われをふかくねむらす  
死はつねに唐突にして歌の友の死を聞く耳のこごる冬の夜

おんごろもち

浅野 千里 香川

カラスにはカラス語ハトにはハト語にて愉しさうなり春のうらうら  
靴底に重いほど春の泥つきて罪びとのごとしレモンを穫るに  
みみず追ひレモンの根を切る不届き者おんごろもちの穴あまたあく  
穴ばかり見てすがた見ることのなきおんごろもち想もふレモン穫りつつ  
合はせゐる背あたたかしこの冬を閉ざす雨音聴きゐる夜更け

わが格闘技

江頭 洋子 長崎

寒鯨のあたまを落しをびれ切りはらを抉りてわが格闘技  
カラカラとブリキのバケツ景気よく春一番を連れて来にけり  
他人の名はどうでもよいがしかし何故コラムニストの辛酸なめ子氏  
人間の観察場所とたのしみしバス停はいますマホ人ばかり  
わたしには謎解きできぬ歌なればさつと投げ出し啄木を読む